

特選

『西野さんとお母さんの「ん」』

田丸小学校 四年 井畑 杏

総合的な学習の時間に西野さんという車イスに乗っている方が、私たちにいろんな話をしに学校に来てくれました。私たちは、グループにわかれて、困っている人がいたら何ができるのかについて話し合いました。その中で車イスに乗っている人は、坂道を上がるのが大変だと思うので、見つけたら「押してあげる」という意見が出ました。教室に帰って西野さんにお礼の手紙を書く時間に話し合ったことを書くこととしたとき、先生が、

「してあげると書くのは失礼だよ。」

と言っていました。でも私はその時、どうして失礼なのかわかりませんでした。そこで、この作文を書きながら、どうして失礼なのかを考えていきたいと思います。

私たちは、西野さんが帰るときに車を見せてもらいました。私は、車のことをあまり知りませんでした。駐車場に車イスのマークが描いてある優先駐車場があることを知っていました。優先駐車場は、車イスの絵が描いてあるけれど車イスに乗っている人だけでなく、障がいのある人、にんぶさん、お年よりの人も止めていいそうです。なぜ私が、その事を知っていたかというとお母さんの片方の手足が不自由になっ
てしまい、使う機会があったからです。お母さんは、たくさん買い物をするときや、入りたい建物から遠い駐車場しか空いてないときなどに優先駐車場に止めています。私も荷物を

持ったり、弟の手をつないだりして手伝っています。お母さんは走れないし、手もあまり動かないから、そういった障がいのある人にとって、優先駐車場みたいな場所があるのは、すごく助かるんだなあとお母さんを見ていつも思います。

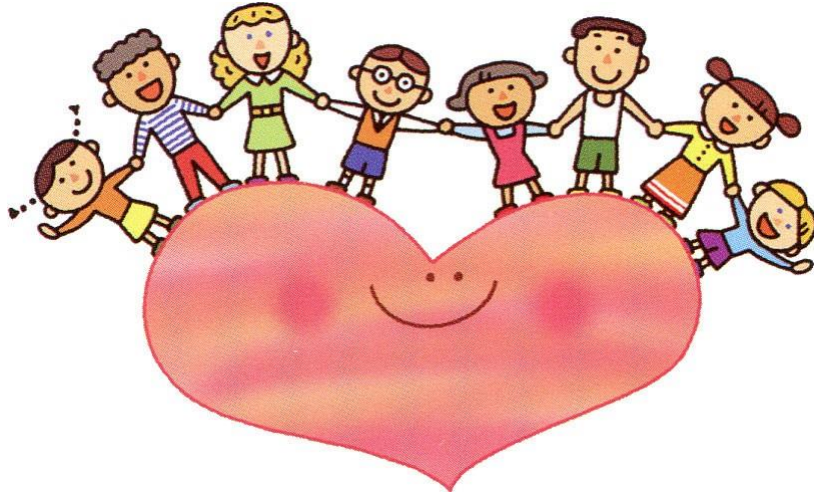
しかし、場所が少なくて空いていないことも多いので、障がいがある人や、にんぷさん、お年よりの人など、みんなが暮らしやすい世の中にしていくためには、もっと場所をふやしてもいいのではないかなと思います。

私の身近には、体が不自由になつてしまったお母さんがいるので、せんとく物をほしたり、あらい物をしたり、包丁を使ったりするのが大変そうに思います。西野さんに見せていただいた車の運転も大変なんだなと思いました。お母さんは、左手が使えないので運転はいつも片手でします。少しだけこわいときもあるけれど今は見なれました。

よく考えてみると、お母さんには、「してあげる」と思うことはあまりなく、私から手をつなぎに行ったり、大変そうにしていたらかわりにしたり、お母さんに手伝ってほしいと言われたことをするなど、私にとつては自然なことばかりです。それはどうしてなんだろうと考えたときに、お母さんは片方の手足が不自由なだけで他のお母さんと何も変わらないうちかと思っていました。体が不自由で障がいがあっても、他の人とちがうと思っていなければ「してあげる」という言い方にはならないんだと思いました。

家族であるお母さんだけでなく、他の体の不自由な人の嫌

がることをしたり言ったりせず、困っている人がいたら自然に手を差し伸べて、みんなが助け合って生きていける世の中にしていきたいです。車イスに乗っている人には、階段でなくスロープを作ればいいと思います。目が不自由な人のためには、手にふれやすい場所に、もっと点字をふやし、それだけでなく、点字をみんなも勉強して読めるようにすれば、もっとみんなで気持がわかりあえる世の中になるのではないかと思います。



特選

『小さな幸せ』

玉城中学校 三年 戸上 夕葉

小学五年生の一学期が終ろうとしていた頃、担任の先生からプリントが一枚配られました。それが、私が福祉について興味を持つことになった夏休み自由参加の福祉活動の申し込み書でした。当時、福祉について特に興味をもっていることはありませんでしたが、遊び感覚で何気なく参加してみました。

福祉活動の内容は、玉城町保健福祉会館で設けられているデイサービスのボランティアでした。ぬり絵や散歩、体操によって利用者さんと楽しく話しているうちに、私の笑顔と利用者さんのはにかむ表情のあたたかさがつながつているような気がして、小さな幸せを感じました。それから私は、福祉の介護の仕事につき、高齢者の方と幸せをもっと共有したいと思うようになりました。

玉城町では、少子高齢化が大きく進んでいるため、高齢者福祉についてしっかりと取り組んでいます。それによって私は今までたくさん高齢者の方々に関わる行事に参加する機会をもつことができました。

小学六年生の春、また福祉活動を体験することができました。五年生の時は私以外にも参加者がいて緊張することはありませんでしたが、今度は自分一人の参加だったので緊張を感じました。でも、私が利用者さんの連絡ファイルの作成をしている最中、利用者さんから笑顔で話しかけてくれて

私の気持ちを温めてくれました。座っている方と話すためにずっとしゃがんでいると腰が痛くなりましたが、痛みも忘れるほど楽しく話をすることができました。同じ年、玉城中学校吹奏楽部が老人ホームにも演奏をしいっている、という話を聞き、入部することを心に決めました。そして中学一年、二年のクリスマス、宮の里、はなのそので演奏させていただくことができました。知っている曲は口ずさみ、リズムのいい曲は手拍子で楽しんで笑顔になってくださったので良かったです。そして、私達の演奏を聞いたがん患者の方が

「あと二、三年は今日の演奏で生きとれそうやわ、ありがとう。」

と声をかけてくださり、人の幸せをつくれたうれしさで胸がいっぱいになりました。

二年生の職業体験では、夢である介護士にもっと近づくために、保健福祉会館のデイサービスを選びました。実際に車いすをおしたり食事の手伝いをしたりしながら、手助けについて学びました。介護士は、日々の生活の手助けをする職業だから普段の生活でまわりの人達の手助けに積極的に取り組んで、日々の幸せをつくっていききたいと思いました。

福祉に携わることで、私はたくさん幸せを感じることができました。私達の普段の生活や老後の生活を守ってくれるのが福祉です。私はもっと福祉について学んで、福祉に携わることだけでなくさんの人々を支えていきたいと思えます。そうすれば、私達の老後も安心して暮らせると思うからです。私にも、町の人々にも、私達の将来にも幸せを守り続け

てくれる、そんなあたたい玉城町を、私は誇りに思います。



入選

『西野さんと出会って』

田丸小学校 四年 中津 勇心

ぼくは、西野さんに出会う前は、車いすに乗っている人は、どうやって生活しているのか知らなかったし、少し暗い感じの人かなと思っていました。

でも、西野さんに実さいに会ってみると、すごく明るくてやさし人でした。ぼくは、西野さんが車いすのあつかいになっていることと、自分で車いすを動かして、ぼくが思っていたよりも、スムーズに動けることにびっくりしました。けれど、ずっと自分で車いすを動かすのは、とてもつかれるだろうなと思いました。ぼくは、車いすが自動で進んだり止まったりできたらいいと思いました。

西野さんは、

「高い段差や坂道や階段があると、車いすのタイヤがつまって動けなくなるから困る。」と言っていました。ぼくは、その話を聞いて、車いすに乗っている人たちが、安全に移動できるように、町中に車いす専用の通路があったり、階段のあるところにはすべてエレベーターがついていたりすればいいのと思います。

ぼくが、西野さんの話を聞いて、一番びっくりしたのは、西野さんが車を自分で運転することです。アクセルもブレーキも手だけでそうさができるそうです。ぼくは、そんな車があることを知らなかったので、すごいなと思いました。

ぼくの将来の夢の一つは、車屋さんになることです。もし、ぼくが車屋さんになったら、普通の車だけではなく、西野さんが乗っているような車の販売や修理もできるようにになりたいです。そして、一人でも多くの足の不自由な人を車に乗れるようにしたいです。

ぼくは、今まで何回か車いすに乗っている人を見かけたことがあります。その時は、特に何も思いませんでした。でも、西野さんとの出会い学習でいろいろな話を聞いて、これからは、車いすに乗っている人を見かけたとき、段差や坂道で困っていたら、後ろから押してあげたり、手伝ったりしたいと思うようになりました。声をかけるのは、少しきん張するけれど、がんばって自分から、

「手伝います。」

と言えるようになりたいです。

他にも、まだぼくにできることがいろいろあると思うので、西野さん以外にも、もっとたくさんの人から話を聞いてみたいです。そして、ぼくにできることを一つでも増やしていきたいです。



入選

『世の中の幸せ』

外城田小学校 六年 辻井 菜々美

社会福祉とは、辞書で調べてみると、「人々の幸せ」「世の中の幸福」「生活の幸せ」とのついでにありました。

私のお母さんは介護施設で働いています。そこは高齢者の人ではなく、生まれつきの病気で、一人では生活することができずにいる人たちのお手伝いをする職場です。これを聞くと、普通「かわいそうだね。」と、口に出す人もいるかもしれないけれど、私はそう思いません。なぜなら、私たちもみんなに支えられているからです。障がいがある人もない人も支えがないと生きてはいけません。それは共通しています。一人ではできないこともみんなで行うとできることと同じです。また、世の中の人は、それぞれがいます。例えば、青色が好きだけど赤色がきらいな人、その反対で赤色が好きだけど青色は嫌いという人がいることと同じだと思いません。私がこの世の中は支え合ってできていると思う理由は、二つあります。

一つ目は、登下校の安全を見守るパトロール員さんの存在です。私たちの安全を守るために毎朝、寒い日でも、暑い日でも、大雨の日でも、風のときもどんなことがあってもきてくれるパトロール員さんたちがいます。ときには、重い荷物を持つてくれたり、笑わせてくれたりしたこともありました。

感謝を伝える会でお礼を伝えるために、手紙を書きました。私は、もっとお礼をしなければ足りないくらいだと思っています。

二つ目は、介護する人です。お母さんは介護される人の笑顔を作るのも介護の一つだと言っています。昔、曾祖母の介護施設に行きました。その施設は、みんな笑っていたことを覚えています。そんなに記憶には残っていないけれど、介護する人がレクリエーションを考えて楽しそうに遊んでいるおじいちゃんやおばあちゃんたちがいたのが印象に残っています。

社会福祉は、一人だけの幸せではなく、世界の幸せ、世の中の幸せということだと改めて強く感じました。少しでも役にたてるボランティアがあれば参加して行って、世の中の幸せに、一歩でも近づけていきたいです。



入選

『助け合』

有田小学校 五年 植村 亮太

三年生の夏、ぼくは鉄棒から落ちてしまい、左腕を骨折する大けがをしてしまいました。その時の、ものすごいいたみと、左手が全く動かさなく「どうしよう・・・。」と、うずくまっていたことを今でもはつきりと覚えています。すぐに病院に運んでもらって、手術をしてもらいました。ぼくの左うでは骨をつなぐために針金が三本も入れられていました。ひじの上から指の部分までギプスがまかれて指先しか動かせない状態でした。ギプスが外れ、骨折が治るまでには二か月半近くかかり、さらに左手が自由に動かせるようになるまでには半月かかりました。左うでにまかれたギプスの中はかゆくなるし、大好きな運動や水泳もできなくて、とてもつらかったことを覚えています。利き手の右手は使えましたが、左手が使えないと、思った通りには生活できませんでした。左手が使えないと、ご飯を食べるときは茶わんやお皿を持つことができないし、字を書くときはプリントやノートをおさえることができません。学校で教科書を開くときも思うように開くことができませんでした。服を着がえるときは、左手のギプスにひっかかり、うまくぬいだり、着たりすることができません。お風呂に入っても左手をぬらさないようにしないといけないし、寝るときは左手をかばうようにしないとい



けないなど何をするときも大変で、一人では生活できませんでした。

けがをしたことで、自分の体を自由に動かすことができない生活が、どれだけ大変かを知りました。けがはとても痛かったし普段の生活にこんなにも関わってくるなんて想像もできませんでした。「動かしたくても動かせない・・・」今までに経験したことのない気持ちになりました。

しかし、ぼくを見て、助けてくれる家族や先生や友だちがたくさんいました。家族は登下校の送迎をしてくれました。友だちはランドセルや持ち物をいっしょに運んでくれたり授業や給食の準備をするときに手伝ってくれたりするなど、たくさんの人に助けてもらいました。そのおかげで、ぼくは、三か月間生活することができました。

世の中では、たくさんの人が助け合いながら生活しています。例えば、介ごサービスを受ける人がいます。また、盲導犬や車いすなど、自分の体の代わりになって助けてもらうこともたくさんあります。

ぼくは、けがの経験できづいたことがたくさんありました。痛かった、つらかった、けれどたくさんの人に助けてもらってうれしかった。そのとき感じたことを今でも忘れていません。だからぼくは、自分の周りで困っている人がいたら声をかけたり、できることがあれば手伝ったりして、少しでも力になりたいと思います。



入選



『気持ちの大切さ』

下谷坂日小学校 四年 奥野 颯

「車いすって大変だろうな。」と、ぼくは思いました。社会のじゅぎょうで、車いすに乗っている西野さんから、事故にあったことや車いす生活のことを聞きました。西野さんは、世の中には目や足が不自由な人がいっぱいいると言っていました。

ぼくは、目や足が不自由な人の役に少しでもたてたらいいななど思いました。そう考えた理由は、ぼくが積極的に力になれば、その人たちはふだんの生活より少しは楽になれるからです。

じゅぎょうでは、車いすにも乗りました。車いすに乗ったのは、初めてでした。一人で乗ったのと、おしてもらったのでは、全ぜんちがいました。おしてもらった時、後ろに人がいるので、声をかけてもらいながら進んでいくと、次に何がおきるかがわかりやすかったです。

「進むよ。」

とか、

「止まるよ。」

とかの一声だけで、車いすに乗っている人は進むことや止まることがわかるので、安心できます。車いすをおすときに、声をかけてあげることが大切だと学びました。



ぼくのおばあちゃんも、車いすに乗っています。おぼんやお正月に帰ってきて、みんなでごはんを食べます。車いすですべて部屋に入るのは、大変です。だん差がいくつあるのか、車いすのままでは入れません。大人が集まって、四人でおばあちゃんごと車いすを持ち上げます。この時も、おばあちゃんがこわがらないように

「今から持ち上げるよ。」

「せーの。」

と、声をかけていました。

ぼくは、おばあちゃんの食事を手伝ったことがあります。

長い間食べているとつかれてくるようです。ぼくが、

「くりきんとん食べたい。」

と聞いたたら、

「うん。」

と、うなづきました。だから、気をつけて食べさせてあげました。何に気をつけたかというところ、少しづつ、ゆっくり、飲み込んだことを見てから、次を口に入れることです。おばあちゃんが

「ありがとうございます。」

と、言ってくれたのでうれしかったです。

ぼくは、目や足が不自由な人の役にたつことは、相手の気持ちになつて考えることだと思えます。車いすをおす時、相手がどうしてほしいか考えながらしたらよいです。相手に直せつ聞くのもよいと思えます。

困った人がいれば、まず、声をかけてみます。相手が何か

してほしかったら、その気持ちになって考え、行動していきたいです。

入選

『出会えたからこそ』

玉城中学校 二年 中山 紗智

私は、耳が聞こえない人に会ったことがあります。その方は、友人のおばあさんで、手話でしか会話ができません。小学生で初めて出会い、そんなこととは知らず、「ちゃんとしやべってほしい。どうしてこの人は会話ができないのか……。」と、心の中でおばあさんのことを差別してしまっていました。このとき、手話が会話のひとつであるということも知りませんでした。手話は声を出さないのです、その様子を横で見ている私は、何を話しているのかちんぷんかんぷんでした。

この日をきっかけに、その友人のおばあさんと会うことが増えました。最初のうちは会っても逃げていたり、目を合わせないようにはしたりと、なぜか必死でした。私の母はそんな姿を見て、あきれていました。私の母もその方と接する機会がありました。すっかり目を合わせ、どこか楽しげにコミュニケーションをとっているように見えました。そんな姿を見て、自分のとっている行動が恥ずかしく間違っていると思うようになってきました。それから、私は、おばあさんに自分の存在に気づいてもらえるよう、簡単な手話や指文字で会話をするようになりました。そのかわりを通じて「このおばあさんにとっては優しい人なんだ、とっても面白い人なん

だ」と、コミュニケーションをとることの楽しさに気づくことができませんでした。そして、「もつともつと手話ができるようになりたい」と思わせてくれたのもこのおばあさんでした。私の中にあつた、間違つた見方が変わつていった気がしました。

また、私の考え方を変えてくれるきっかけは他にもありません。テレビの中で、タレントさんが、盲目の方の役をしてドラマに出演していました。そこでのやりとりやふれあいの様子を見て、改めて、手話でのコミュニケーションの苦労や難しさを感じました。

そんなさまざまな出来事とのかかわりを繰り返す中で、私には将来の夢ができました。それは「手話で人を笑顔にすること」です。今すぐには難しくても、いくつになっても持ち続けられる夢だと思えます。手話と出会えたおかげで、私自身人が大切にできるようになりました。いつか困っている方の手助けをしたいと思っています。手話は、とつても奥が深いものです。また、そんな簡単なものではありません。人によって表現の仕方がちがいます。まずは、友人のおばあさんと一対一で会話ができるように、本格的に手話の勉強を始めました。まだ、完璧にできませんが、必ず実現したいと思っています。また、知っている方だけにとどまらず、初めて出会った人とも手話で会話ができるようにしたいです。

私ははじめ、偏見の目でおばあさんを見ていました。でも、そんな私を変えるきっかけくれたのもそのおばあさんでした。将来の夢まで見つけることができました。昔の私のよ

うに、年配の方や障がいをもった方を、勝手に差別してしまっている人もいるのではないでしょうか。私は、いろんな出会いがあったから今ががんばれる自分がいます。おばあさんに感謝の気持ちでいっぱいです。これからもいろんな人との出会いを大切にして、手話の勉強をがんばりたいです。そして、将来の夢を実現させたいです。

